日本医史学雑誌第三十九巻第二号
平成五年六月二十日発行　平成四年三月三日受付

御雇教師シュルツェの「外科通論」

——明治初期教科書使用状況一斑——

小関恒雄

はじめに

明治初期、東京大学医学部の御雇教師により各科講義録がつくられ、それら一部は翻訳刊行されて各地医学校で教科書に使われていた。著者はかつて、うち二、三を紹介したことがある。[一、二、三] 御雇教師が用いた原文テキスト(以下、テキスト)が現存しており、かつそれらテキストの種本が明らかなものもある。[三]

さて、明治九年(一八七六)来日した外科教師シュルツェ(Wilhelm Schultze, 1840〜1924)[四]の場合もテキストが残っているので、以下紹介したい。

シュルツェの「外科通論」

シュルツェの外科通論テキストのうち、著者が管見しえたのは次の二書である。

ⓐ"Allgemeine Chirurgie"

ⓑ"Vortraege der allgemeine Chirurgie", 1880

うちⓐは筆記（写）本であり、シュルツェ講義云々等一切記されていない。奈良坂源一郎の旧蔵（たぶん同人筆記であろう）である。ⓑは活版本であるが、トビラは旧蔵者（川原汎）の手書きであり、東京大学医学部外科眼科教授シュルツェ講義の旨明記してある。いずれも、名古屋大学附属図書館蔵である。

ⓐの内容は次の通りである。（〔　〕内は著者加筆）。適宜タイトルを簡略化したりスペリングを直したりはしたが、順序は変えていない。

〔Einleitung〕
Von der Entzündung
Verletzungen, Laesionen, Traumen
Von den Geschwülsten oder den krankhaften organisierten Neubildungen
Krankheiten der Haut
Krankheiten des Bindegewebes
Von den Blutungen
Krankheiten der Nerven
Krankheiten der Knochen
Krankheiten der Gelenke
Krankheiten der Muskeln und Sehnen

ⓐとⓑの全体の構成、順序は殆ど同じである。ただしⓑにはK. der Hautの章が抜けている。（偶々川原旧蔵本のみが欠けているのか、該テキストが通し頁になっていないので不明であるが、川原が付した仮通し頁からみると元々含まれていないことになる。）またⓑはⓐより部分的に詳しかったり加筆があったり、改訂版（逆にいえばⓐは要約筆記本）の感がある。例

えば、第一章“Entzündung”中の Antiseptische Behandrung（リスター法）はⓐの方は極めて簡単であるが、ⓑでは具体的に手技調合法まで書いてある。

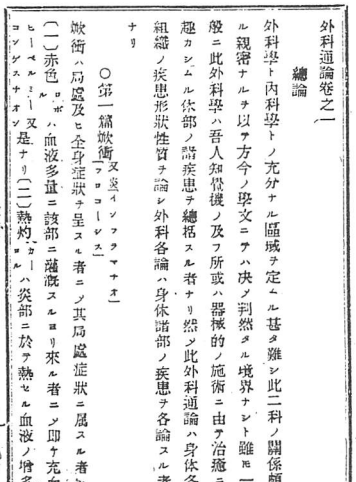
さて、シュルツェの該テキストは翻訳されており、当時の医学校で広く教科書に使われていた。即ち、下記ⓔ山崎、石黒による『朱氏外科通論』である。[五] ところが、その他にも訳本があることがわかった。つまり、下記三種類が現存することになる。

ⓒ『外科通論』巻之一～五（四冊に分冊）、活版和装、書誌事項なし

ⓓ『外科通論』巻之一～五（一冊に合冊）、活版洋改装、書誌事項なし

ⓔ山崎元脩、石黒宇宙治訳（長谷川泰閲）、『朱氏外科通論』巻之上・中・下、島村利助発兌、一八八四

これら翻訳本とテキストを照合すると、ⓒはⓐを、ⓓⓔはⓑを、それぞれ全文訳したものであることがわかる。ⓒⓓには前記のごとく、訳者、発行（発兌）者、刊年等は全く記されていない（図1、2）。ただし偶々ⓒの各冊の下小口には



外科通論卷之一

總論

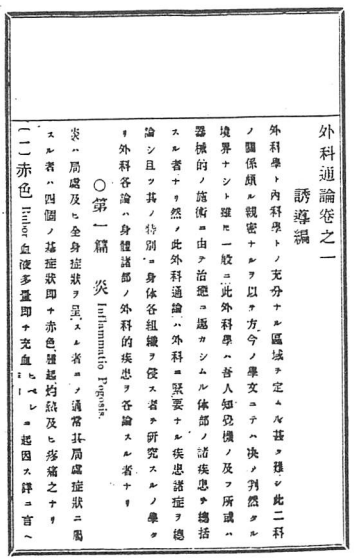
外科學ト內科學トノ充分ナル區域ヲ定ムル甚タ難シ此二科ノ關係頗ル親密ナルヲ以テ方今ノ學文ニテハ決ノ判然タル境界ナシト雖モ一般ニ此外科學ハ吾人知覺機ノ及フ所或ハ器械的ノ施術ニ由テ治癒ニ趣カシムル体部ノ諸疾患ヲ總括スル者ナリ然ノ此外科通論ハ身体各組織ノ疾患形狀性質ヲ論シ外科各論ハ身体諸部ノ疾患ヲ各論スル者ナリ

○第一篇 燃衝 又炎インフラマチオ［フロコーレス］

燃衝ハ局處及ヒ全身症狀ヲ呈スル者ニノ其局處症狀ニ屬スル者ハ

(一)赤色 ロボ ル ハ血液多量ニ該部ニ蓄溜スルヨリ來ル者ニノ即チ充血ヒーペルミー又是ナリ(二)熱灼 カー ハ炎部ニ於テ熱セル血液ノ增多コンゲスチオン

図1　『外科通論』（シュルツェ講か）第1頁



外科通論卷之一

誘導編

外科學ト內科學トノ充分ナル區域ヲ定ムル甚タ難シ此二科ノ關係頗ル親密ナルヲ以テ方今ノ學文ニテハ決ノ判然タル境界ナシト雖モ一般ニ此外科學ハ吾人知覺機ノ及フ所或ハ器械的ノ施術ニ由テ治癒ニ趣カシムル体部ノ諸疾患ヲ總括スル者ナリ然ノ此外科通論ハ外科ニ緊要ナル疾患諸症ヲ總論シ且ツ其ノ特別ニ身体各組織ヲ侵スヲ研究スルノ學タリ外科各論ハ身體諸部ノ外科的疾患ヲ各論スル者ナリ

○第一篇　炎 Inflammatio Pogosis.

炎ハ局處及ヒ全身症狀ヲ呈スル者ニノ通常其局處症狀ニ屬スル者ハ四個ノ基症狀即チ赤色腫起灼熱及ヒ疼痛之ナリ

(一)赤色 Rubor 血液多量即チ充血ヒペレミー ニ起因スル詳ニ言ヘ

図2　『外科通論』（書誌事項なし）第1頁

「大学校　外通」と記され、うち一冊の見返しには「東京大学医学部外科教師シュルッ氏外科総論メモランドム訳　外科通論」と、トビラ風に記されている。

検　討

前述のごとく、テキストⓐは愛知医学校教諭奈良坂源一郎（明治十四年東京大学医学部卒）の旧蔵本である。一応彼が筆写したものとすると、ⓐは彼が三等本科生、即ち明治十一～十二年に受講したことになる。[四、六]

ⓑも旧蔵者同校教諭川原汎（明治十六年卒）の三等本科生当時の受講本とすれば、明治十三～十四年受講となり、トビラの一八八〇年と合致する。即ち、シュルツェは明治十三年十二月より十四年五月に至る冬半期に「外科総論中ノ煩衝創傷及ヒ腫瘤篇」を三等本科生に講じた。[四] 彼は同十四年五月に帰国するから、川原らは途中まで彼に習ったことになる。総論の残り（約⅔）と各論は後任のスクリバに習ったのだろうか。川原らのクラスの卒業証書（明治十六年七月）には「外科病床実験　外科論理　眼科学」担当者（合格判定者）として、スクリバのサインがなされている（川俣昭男氏提供）。

シュルツェのテキストⓑは明治十七年翻訳出版された。[四] 訳者山崎元脩（玄修）は明治九年東京医学校卒、石黒は同十二年東京大学医学部卒（つまり初の医学士の一人）、[七] いずれも長谷川と同郷の内弟子であり、勿論シュルツェの教え子である。二人とも当時長谷川の済生学舎で教鞭をとっていた。明治二十年頃の同校の規程によると、「外科通論」の教科用図書には『朱氏外科通論』三冊（明治十七年五月刊）が挙げてある。[五]

訳本ⓒⓓとⓔとを比較すると、同一人による翻訳のように思われる。前述のごとくⓒはⓐの、ⓓⓔはⓑの訳本である。そしてⓒ、ⓓ、ⓔの順に出来たことは、訳語、用語などからも推断できる。例えば、ⓒの「煩衝」がⓓⓔでは「炎」、Hypertrophieがⓒでは「細胞質ノ滋養過多」、ⓓⓔでは「組織新生」、ⓒの「ヒルセウ氏」がⓓⓔでは「ヒルシヤウ氏」など。またⓒでは重さを3やゟに換算（併用）している。

では、なぜⓒⓓに原著者、訳者名などが記されていないのだろうか。苦労して漸く翻訳したものに、わざと名前を伏して刊行したからには何か事情があろう。察するに、訳者（山崎らと仮定して）は済生学舎や（神田小川町の）東亜医学校で教科書として使用していたのではなかろうか。そして、のちシュルツェの許可を得て（或いは帰国してしまってから）正式に堂々と名前を出して出版したのではなかろうか。しかし、この辺の推測は確かな根拠があるわけではない。[八] シュルツェ自身も語ってはいない。[四]

当時、各地の医学校では佐藤進の『外科通論』の一方、シュルツェの教え子たちが彼の講義録や『朱氏外科通論』を教科書として用いていた（例えば明治十年代の「文部省日誌」参照）。いわば当時の教科書を二分していた佐藤の教科書は、彼の師ビルロートのそれを訳纂したものである。当時、外科の教科書といえば T. Billroth の“Die allgemeine chirurgische Pathologie und Therapie”が抽んでていた。

上記のごとく佐藤の本（一八七六～八〇刊）はビルロートの教科書（六版、一八七四）を訳纂したものである。では、シュルツェは誰の教科書を直接参照したのだろうか。即ち、種本は何であろうか（常識的に彼の全くのオリジナルとは考えられない）。第七版（一八七五）、第八版（一八七六）を見た限りではビルロートではなさそうである。また、足立寛の訳した『彪氏外科通論』の原著 C. Heuter の“Grundriβ der Chirurgie”でもなさそうである。

シュルツェの師バルデレーベン（Adolf Bardeleben, 1819～1895；シャリテ教授）の“Lehrbuch der Chirurgie und Operationslehre”, 5 Aufl.（1866～67）はどうであろうか。上記二書よりは類似の度合は大である。Bardeleben は冒頭に“Prolegomena”を置き頁をかなり割いているが、第一編“Von den chirurgischen Krankheiten im Allgemeinen”は Entzündung に始まり Brand, Neubildungen,……と続く。第二編は Krankheiten des Haut, K. des Bindegewebes, K. der Arterien, ……と続き、K. der Muskeln u. Sehnen で終る（図3、4）。

勿論、文章が同じではなく、内容（分量）も約半分以下にすぎない。しかし、章の組立て、順序等、さらに見出しや key

Erste Gruppe.
Ernährungs-Störungen[1]).

Erster Abschnitt.
Exsudative Processe, Entzündung und Entzündungs-Ausgänge.

Erstes Capitel.
Von der Entzündung (Inflammatio, Phlogosis).

Bei der unüberwindlichen Schwierigkeit, eine genügende Definition der Entzündung zu geben, lehrt die Chirurgie von Alters her, es bestehe Entzündung, wenn an einer Körpersteile Schmerz, Hitze, Röthe und Geschwulst auftreten, und man muss in der That auch jetzt noch zugestehen, dass die genannten Symptome, wo sie an einem unseren Sinnesorganen zugänglichen Theile gleichzeitig auftreten, auf das Bestehen einer Entzündung schliessen lassen. Die Entzündung ist bald als selbstständige örtliche Krankheit, bald als Ursache, Folge oder Begleiterin anderer chirurgischer Krankheiten, bald endlich als ein zur Heilung anderer Krankheiten absichtlich herbeigeführter krankhafter Zustand von der grössten Wichtigkeit für den Chirurgen.

Erscheinungen der Entzündung. Wir haben örtliche und allgemeine Symptome der Entzündung zu unterscheiden.

A. Oertliche Symptome. — 1. Schmerz. So wie in der Mehrzahl der Krankheiten überhaupt, so fehlt in der Entzündung insbesondere der Schmerz nur selten. Die Heftigkeit desselben steht gewöhnlich in geradem Verhältnisse zu der Heftigkeit der Entzündung; jedoch giebt es hiervon zahlreiche Ausnahmen. Er ist verschieden je

[1]) Vgl. Virchow, Specielle Pathologie und Therapie, Bd. I. pag. 46—94 und pag. 271—355.

図4　A. Bardeleben : "Lehrbuch d. Chirurgie u. Operationslehre" (1866) Bd.I, 207頁

EINLEITUNG.

Eine genaue Abgrenzung des Gebietes der Chirurgie gegenüber der inneren Medicin ist nicht möglich. Im Allgemeinen umfasst die Chirurgie alle diejenigen Krankheiten, welche in den unseren Gefühlsorganen zugängigen Theilen des Körpers ihren Sitz haben oder welche die Anwendung mechanischer Mittel zu ihrer Heilung zulassen. Die allgemeine Chirurgie behandelt die für die Chirurgie wichtigen Erkrankungsformen im Allgemeinen und nach ihrem besonderen Auftreten in den einzelnen Körpergeweben.—Die specielle oder topographische Chirurgie behandelt die chirurgischen Erkrankungen an den verschiedenen Theilen des Körpers.

ALLGEMEINE CHIRURGIE.

I. Capitel Von der Entzündung.

Inflammatio, Phlogosis.

Die Entzündung hat *örtliche* und *allgemeine* Symptome:

Zu den örtlichen Symptomen rechnete man gewöhnlich vier Cardinalsymptome: rubor, tumor, calor, dolor.

1. *Röthung, rubor* bedingt durch grösseren Blutreichthum (Hyperämie) durch eine Erweiterung des Lumens der Gefässe und durch eine stärkere Anhäufung von rothen Blutkörperchen in denselben. Die Röthung geht in das bläuliche über, weil besonders die kleinen Venen ausgedehnt sind.

2. *Hitze, calor* bedingt durch den vermehrten Gehalt des entzündeten Theiles an warmem Blut. Die Temperatur eines Körpertheiles steigt daher nur dann, durch die Entzündung, wenn dieser Theil eine Temperatur hat, die geringer ist als die Bluttemperatur. Niemals kann die Wärme im entzündeten Theil höher steigen als die Blutwärme.

3. *Geschwulst, tumor*, bedingt durch den vermehrten Blutgehalt, durch vermehrten Austritt von Blutplasma aus den Gefässen.

4. *Schmerz, dolor*, bedingt durch den Druck der Entzündungsgeschwulst auf die Nerven des entzündeten Theils, und durch den veränderten Stoffwechsel in den Nerven selbst.

Wenn diese vier Symptome alle vorhanden sind, dann ist eine Entzündung sicher. Es können aber auch bei einer Entzündung

図3　W. Schultze : "Vortraege der allgemeine Chirurgie" (1880)第1頁

となる語も、所々比較した限りにおいて大方一致する。ただしバルデレーベンにはリスター法の記載がない(年代からいって当然であるが)など、異る点も勿論ある。また、後半において両者の違いが目立つ。

なお、本書は第六版が一八七〇～七二年に、第七版が一八七四～七六年に発行されている。シュルツェが(彼が本書を手本にしたと仮定して)どの版を使ったのかは、各版を全て閲覧し得なかったので断定は避けたい。

しかし、元来、教科書というものは内容や順序にそれほど大差のないものである。該テキストも部分的にはむしろビルロートに類似した箇所も見出される。ともかく、管見の限りにおいて、シュルツェはシャリテでの師バルデレーベンの教科書などを基にして自分のテキストを編んだのではなかろうか。

ところで、シュルツェの評判(ひいては彼の力量)は、前任者ミュラーや後任のスクリバの中にあって、どうも芳しくない。それは多分に、石黒忠悳や北里柴三郎の語る森鷗外らに係る逸話に拠るものと

思われる。一方、阿知波は詳細な実証によりシュルツェの外科を高く評価し、かつ極めて説得力ある博識をもって、彼(九、一〇)(の時代)の外科を本邦外科学史上に位置づけている。(一一)該論文は氏の論文集にも再録されて広く知られるので繰り返さないが、リスター法と麻酔法(とりわけ局麻の出現)、病理解剖、さらに組織学的検索の発展などにより、腹部外科へと道が拓けた点を挙げている。しかし、氏はなぜかシュルツェのテキストもそれら訳本も全く取上げていない。それに、バルデレーベンの教科書の紹介もしていない。これは該教科書がわが国で翻訳出版されていないこととも関係があろうか。

付記 シュルツェは外科各論のテキスト("Die Vortraege der speciellen Chirurgie")も残しているが、本稿では触れない。いずれ検討したい。ただ津山が(氏の関心は森鷗外旧蔵本の書込みに集中するも)本テキストを論じているが、(一二)種本については言及していない。(一三)

該テキストは、鷗外がシュルツェの講義を一部漢字で同書に書込み、師に悪ふざけととられ、結果としてクラス二十八人中八番にしかなれず留学の機会を失った元凶(証拠品)として、種々鷗外アルバム(最新のものでは、新潮社版、一九八五)に掲載され、妙な所から有名になったのである。著者もかつて、その一葉を紹介したことがある(日本医事新報三二二九号、七三頁、一九八六)。因に、本テキストは山崎らの同僚山田良叔(五)により「通論」に先立ち翻訳刊行されている(『外科各論』巻上・下、一八八三)。(一四)

まとめ

明治初期、各地医学校で使われていた「外科通論」の教科書は佐藤進とシュルツェ(山崎、石黒訳)のものでいわば二分されていた。前者はビルロートの教科書の纂訳であるが、後者即ちシュルツェのそれは誰の原著を基にテキストを編んだのか、今まで調べられていなかった。

著者は、それをシュルツェの師バルデレーベンの"Lehrbuch der Chirurgie und Operationslehre"あたりではないか

と推定した。かつ、該書はわが国において未だその影響（受容）について論じられていないことを指摘した。

また、シュルツェのテキストの訳本は山崎らの『外科通論』（一八八二）が知られるが、その他に書誌事項不明の同題の書が二種類印刷されていることを紹介し、それら二書は恐く済生学舎などで明治十七年以前教科書に用いられていた私的なもの（無届出版）と推断した。

擱筆に際し、資料の閲覧複写を許された名古屋大学、東北大学、新潟大学、国立教育研究所各附属図書館、文京区立鷗外記念本郷図書館各位並に教示便宜を戴いたDr. H. Vianden（ドイツ）、中野美智子（新潟大学）の両氏に深謝する。

文献および注

（一）小関恒雄、わが国初の近代法医学書、医海時報、六四二号、三頁、一九七五。
（二）小関恒雄、御雇解剖学教師ギールケとディッセ、日本医史学雑誌、二八巻、三一七～三二七頁、一九八二。
（三）小関恒雄、御雇教師エルンスト・チーゲル（二）、日本医史学雑誌、二九巻、四二～四九頁、一九八三。
（四）T. Hesekiel（北村智明、小関恒雄訳）、『明治初期御雇医師夫妻の生活』、玄同社、一九八七。
（五）『東京の理科系大学』（都市紀要一一）、都政史料館、一九六四。
（六）小関恒雄、明治初期東京大学医学部卒業生動静一覧（二）、日本医史学雑誌、三六巻、二二九～二四七頁、一九九〇。
（七）小関恒雄、明治初期東京大学医学部卒業生動静一覧（一）、日本医史学雑誌、三三巻、三一七～三二七頁、一九八七。
（八）当時、教師の講義したノートを「私ニ印刷センコトヲ謀ル者」があったという。或いは山崎らでなく全く他人が「稿ヲ窃ンテ」印刷したことも考えられないことはない（永松東海『生理学』一八八〇、序文より。なお、小関、犯罪学雑誌四八巻一号一九八二参照）。
（九）『陸軍軍医学校五十年史』、陸軍軍医学校、一九三六。
（一〇）宮島幹之助、『北里柴三郎伝』、北里研究所、一九三二。
（一一）阿知波五郎、わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響（四）、日本医史学雑誌、一二巻四号、二～七六頁、一九六六

（なお『阿知波五郎論文集』上、思文閣一九八六参照）。

（一二）津山直一、鷗外の整形外科学習、整形外科、三九巻、一一五～一一六、二七七～二七八頁、一九八八。

（一三）本テキストの内容順序はほぼバルデレーベン本の Bd. 3, 4 のそれに相当することだけを指摘しておく。

（新潟大学医学部）

Textbook of Surgery by W. Schultze, Used at the Tokyo Medical Academy in the Early Meiji Era

by Tsuneo KOSEKI

Wilhelm Schultze, Professor of Surgery of the Tokyo Medical Academy, wrote "Vortraege der Allgemeine Chirurgie" for the benefit of his students in about 1880.

The author examined this book and concluded that it was based upon "Lehrbuch der Chirurgie und Operationslehre" by Prof. Adolf Bardeleben, his teacher at the *Charité* in Berlin.

Schultze's textbook was translated into Japanese and published by G. Yamazaki and U. Ishiguro, his students at the Tokyo Medical Academy, in 1884.

This version was widely used as a textbook in many medical schools at that time, as well as S. Sato's translation of "Die Allgemeine Chirurgische Pathologie und Therapie" written by Prof. Theodor Billroth.

The author found and introduced two different Japanese versions of Schultze's textbook printed without permission.